

ISSN 2436-3782

ちひろ美術館・東京 No.212

安曇野ちひろ美術館 No.105

美術館だより

2021.5.21



現代の町絵師 笑い と 反骨の画家 田島征彦展

●2021年6月5日(土)~9月5日(日)

田島征彦は大阪の堺に生まれ、高知で育ちます。自然豊かな土佐の野山をかけまわり、魚を捕りながら、幼いころに姉の教科書に描かれた椿の花の絵を見て、このような絵が描ける画家になりたいと決心。双子の弟・征三とともに、限られた材料で絵を描く一方、楽しみだった図工の時間では思うように描けない、つくれないことに癪癪をおこし、しょっちゅう泣いていた少年時代でした。田島は美大への進学を直前に決めたため、高校の先生に今から受かる可能性のある学校として京都市立美術大学の染織科をすすめられます。最初は自分に向いていないと断ったものの、入学後好きなことができると論され出願し、合格します。しかし大学時代は、学内の劇団での活動に熱中し、染織にはほとんど関心を示しませんでした。

現代美術やイラストレーションなど幅広く関心をもっていた田島は、在学中に課題で絵本をクラス全員で制作した後、自ら同級生を誘い、物語まで考えた絵本『りんごと宝石』をつくります。さらに、翌年はシルクスクリーンで絵本『まざあくうす』を制作し、東京でデザインを学んでいた征三に見せるために持参します。今では見られたものではないというものの、これらは田島の絵本の出発点ともいえます。

卒業を控え、就職すると制作の時間や場所を失うことに気づき、田島は同大学の専攻科に進学し、ようやく本格的に染織を始めました。

『祇園祭』いまむかし



図1 『祇園祭』(童心社)より 2016年

1973年に田島は京都新聞の連載のために、京都や滋賀の祭を題材にした作品を制作します。その作品の展覧会を見た童心社の編集者に、日本の祭をテーマにした絵本をつくらないか、と声をかけられ、田島は染織科の恩師であり、人間国宝の稲垣稔次郎が語った「祇園祭は太陽にむかうての行進なんや」ということばを思い出し、引き受けます。専攻科を卒業後、大学で講師をしながら制作を続けていた田島は翌年制作に専念するために

仕事を辞め、京都の田舎へ引っ越します。それは、東京の日の出村で畑を耕しながら絵を描く征三の生活が頭にあったからだといいます。

2年の取材と、4年の制作期間を経て1976年に初めての絵本として『祇園祭』を出版。そこには、洛中洛外図屏風(舟木本)に描かれた17世紀の祇園祭のようすからはじまり、祭をさまざまな場面で支える人たちが、祭の経過を追って、恩師の稲垣が用いたのと同じ型絵染という技法で布に表現されています。肌は黒色で表された人物は、祭の華やかな色彩を一層ひきたてています(図1)。

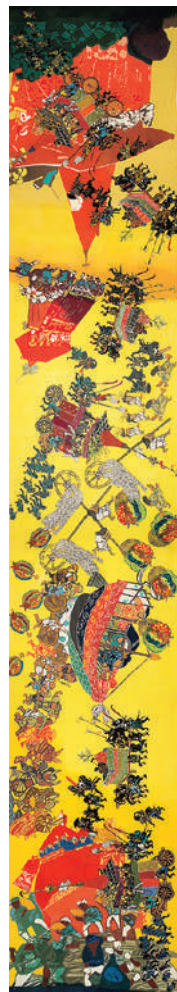


図2 喧騒の中で 2013年 個人蔵

『祇園祭』出版時の取材で「あと5年かかるか10年かかるか知りませんが、祇園祭と取り組みたい」と語った田島は、この祭を題材にした小説『火の笛』の絵本版を1980年に出版し、室町時代の庶民の悲哀を絵巻のように表現しました。その約30年後、京都で祇園祭と同じ時期に染織でこの祭を制作・展示することを提案し、以後現在に至るまで新作を毎年つくり続けています。本展にも出展される大作「喧騒の中で」は、現代と過去の祇園祭の山車や人々が、縦に横に重なりあう壮観な作品です(図2)。

笑い と 反骨の画家

田島はデビュー以降30冊以上の絵本を手がけていますが、

そこに見られる特徴として、ユーモアとあたたかいまなざし、そして権力や理不尽なものに対する怒りや反骨心があります。『じごくのそうべえ』は上方落語の「地獄八景亡者戯」が原作ですが、架空



図3 『じごくのそうべえ』(童心社)より 1978年 大阪府教育庁蔵

の地獄の世界が、なんともおかしな絵本となっているのは、個性的な登場人物と場面の描写にあります(図3)。実際、田島はこの落語のテープを幾度も聞き、幾度も笑いながら制作したといいます。

『てんにのぼったなまず』(1985)は、田島が魅了された大津絵に描かれたなまずと地震のなまずをかけあわせ、取材や構想などに15年をかけて絵と文を手がけた絵本です。村のなかで絵ばかり描き、侍の頼みには耳を貸さず、村人たちのためにはよろこんで描く主人公は、どこか田島とも重なります。

子どもたちと未来



図4 『ふしぎなともだち』(くもん出版)より 2014年

版画や染織などによる一枚絵の作品もつくり続けている田島は、絵本は子どもたちが最初に出会う美術であるので、制作の心がまえは同じだ、と語っています。また、彼の絵本に登場する子どもたちは、日常と社会の現実のなかで一生懸命に生きています。『ふしぎなともだち』では、引っ越してきた転校生のゆうすけの視点から、同じ学校に通う「ふしぎな」ともだちである、自閉症のやっくんととの交流が語られます。竹をすきこんだ紙に型絵染で描かれたふたりの子どもは、鳥の自然のなかでたくましく成長していきます。瀬戸内海の水平線を背景に、自転車とバイクでそれぞれの道を行く最後の場面は、絵本の見開きを生かした広がりをもっています(図4)。



図5 『やんばらの少年』(童心社)より 2019年 個人蔵

『やんばらの少年』は、田島が今まで繰り返し題材にもしている沖縄が舞台であり、現在もヘリパッドの建設で問題になっている高江に何度も通い取材して描いたものです。筆跡も見えるように、紙に染織用の樹脂顔料で描かれた画面では、子どもたちが、轟音をたてて飛行するオスプレイにおびえて空を見上げています(図5)。

「21世紀の時代に呑み込まれないような町絵師になりたい。」と語る田島征彦の作品をお楽しみください。(松方路子)

トットちゃん広場5周年『窓ぎわのトットちゃん』展

●2021年6月5日(土)~9月5日(日)

『窓ぎわのトットちゃん』



図1 こげ茶色の帽子の少女
1970年代前半

世界中で2371万部が発行されるベストセラーとなった黒柳徹子(ちひろ美術館館長)の自伝的物語『窓ぎわのトットちゃん』(講談社)は、雑誌「若い女性」での約2年間の連載を経て、1981年に単

行本として出版されました。

本書はちひろの絵でもよく知られていますが、黒柳とちひろは生前の面識はなく、ちひろの訃報を知った黒柳が遺族へ花束を贈ったことから、現在に至るまでの交流が始まっています。黒柳は、トモエ学園の話を書くなりいつも子どものしあわせを願っていたちひろの絵を使いたいと考え、連載期間中に何度も美術館に通い、エピソードに合うちひろの絵を自ら選びました。表紙を飾るこげ茶色の帽子をかぶってお行儀よくすわる少女(図1)や、半分背を向けて授業を受けている子ども(図2)など……、亡くなる前



図2 教室の席に座る子ども
1966年

に、少し描いていたの?と思う方もいるほどに、ちひろが描く子どもたちの姿は、トットちゃんの世界にび



図3 「このあし たん」 1969年

ったりと寄り添っています。

新しい学校・トモエ学園

小学校を1年生で退学になったトットちゃんが新たに入学したトモエ学園では、小林宗作校長のもと、戦時下にも関わらず、ひとりひとりの個性と可能性を大切に教育が行われていました。たとえば、トモエ学園にはハンディキャップのある子どももいましたが、小林校長は彼らを「助けてあげなさい」ということは一度もなく、いつも「みんな、いっしょだよ。いっしょに、やるんだよ。」とだけいっていました。これには、子どもが生来持っている「いい性質」を見つけて、大切に伸ばし、個性のある人間にしていこうという想いが込められています。小林校長の理想の教育が行われていたトモエ学園ですが、東京大空襲で焼け落ち、本書はトットちゃんが疎開列車で東北へ向かうシーンで終わります。

黒柳徹子といわさきちひろ

「すべて、私のやっていることは、小林先生の『みんないっしょだよ。』が基本になっている^{*1}」

本書の縁でユニセフ親善大使に就任した黒柳は、約40カ国を訪れて子どもたち

主催: ちひろ美術館
協賛: 株式会社ジャクエツ
協力: 講談社

の声に耳をかたむけ、今なお活動を続けています。

一方、青春時代のほとんどを戦争のなかで過ごしたちひろも、戦争では一番弱いものが犠牲になることを痛感し、美しいものが失われ、壊されていく戦争に強い憤りを感じていました。「この全く勇ましくも雄々しくもない私のもって生まれた仕事は絵を描くことなのだ^{*2}」と語るちひろは、無邪気でいきいきとした子どもの姿を通して不戦の想いを訴え、生涯にわたって描き続けました(図3)。

戦争を体験し、子どものしあわせと平和への想いを持つふたりですが、ちひろは描くことで、黒柳はユニセフ親善大使として活動することで、その想いを伝えていきます。そんなふたりの感性が織りなす『窓ぎわのトットちゃん』の世界は、国境を越え、今なお共感と憧れをもって読者の心に響きます。

2021年に、トモエ学園の精神を未来につなぐ「トットちゃん広場」(松川村営)はオープン5周年、『窓ぎわのトットちゃん』は刊行40周年を迎えます。どんな時代、どんな場所にあっても、子どもたちがのびのびと健やかに過ごせる未来を願い、あらためて本書の魅力を紹介します。展覧会を見た後には、トットちゃん広場へも足を運び、『窓ぎわのトットちゃん』の世界を存分にお楽しみください。(高津つぐみ)

2021年に、トモエ学園の精神を未来につなぐ「トットちゃん広場」(松川村営)はオープン5周年、『窓ぎわのトットちゃん』は刊行40周年を迎えます。どんな時代、どんな場所にあっても、子どもたちがのびのびと健やかに過ごせる未来を願い、あらためて本書の魅力を紹介します。展覧会を見た後には、トットちゃん広場へも足を運び、『窓ぎわのトットちゃん』の世界を存分にお楽しみください。(高津つぐみ)

ちひろ美術館コレクション 子どもの時間

●2021年6月5日(土)~9月5日(日)

本展では、当館のコレクションのなかから、さまざまな「子どもの時間」が描かれた作品を紹介します。

あそびの時間

子どもは自由な想像力をめいっぱい使って、あそびます。『怪物を捕りに行きたい』では、最初は森のなかで目に見えないなかの存在に怯えていた少年が、ときとともに次第に想像上の怪物たちとい



図1 バク・チョルミン(韓国)
『怪物を捕りに行きたい』より 2004-2005年

っしょに相撲をとったり、かくれんぼをしたりと、変化していきます(図1)。

日本の各地に伝わる子どもたちのあそびなどを取材して、柳田国男が書いた『こども風土記』。ここでは初山滋が持ち前の流麗な線と装飾的センスを生かし、少女たちが草相撲であそぶ姿が描かれています(図2)。



図2 初山滋(日本)
『こども風土記』より 1941年

ものおもう時間

よるこびや楽しみだけではなく、悲しみや怒りも子どもは持ちあわせています。アンドレア・ペトルリック・フセイノヴィッチの自伝的絵本『いつか空のう

主催: ちひろ美術館
協賛: 株式会社ジャクエツ

えで』では、少女が亡くした母親の思い出と喪失の哀しみを、空色とグレーの静かな色調で表現しています。

やすみの時間

あそんで体を動かしたり、考えたりした後は、子どもはよくやすんで明日のために力をつける必要があります。バシユの描いた『ガブリエラの本』では、ベッドのなかでぐっすりと眠っている少女と、ぱっちり目を開けている月や寝室の動物たちとの対比がほほえましく感じられます(図3)。



図3 エドワルド・ムニョス・バシユ(キューバ)『ガブリエラの本』より 1988年

子どもの時間に戻って大人もどうぞお楽しみください。(松方路子)

生誕111年 赤羽末吉展 日本美術へのとびら

●2021年6月19日(土)～9月26日(日)

主催：ちひろ美術館 特別協力：赤羽家 協力：あかね書房、偕成社、講談社、童心社、福音館書店、平凡社
 後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、
 (公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区 協賛：株式会社ジャクエツ



図1 「だいくとおにろく」(福音館書店)より 1962年

絵本の主題にふさわしい表現を求めて日本の伝統的な美術を研究し、独自の解釈で絵本に取り入れた赤羽末吉。本展では、赤羽の絵本に見る絵画表現に着目します。

日本画家から絵本画家へ

「日本画」ということばは、明治時代に西洋画が日本に入ってきたときに、日本に伝わる画材を用いた絵画を区別するために生まれたことばです。赤羽は絵本を描くとき、主に墨や岩絵の具などの日本画の画材を用いています。

赤羽が最初に日本画を学んだのは、帝展系の日本画家に見習いに入った18歳のときでした。しかし、席画会で掛け軸にする絵を何枚でも同じように描くのを見て、自分には向かないと感じ、1年ほどで門を出たといえます。

本格的に日本画を描き始めたのは旧満州(中国東北部)に渡った20代からで、甲斐巴八郎画家の仲間に出会い、切磋琢磨しながら技術を習得していきました。1940年からは満州国美術展覧会で3年連続特選賞を受賞、満州画壇で注目を集めます。しかし、日本が第二次世界大戦に敗れて満洲国は消滅し、赤羽は1947年に、いのちがけで日本に引き揚げました。

15年間いた中国東北部から日本に帰り、赤羽はまず湿潤な風土の美しさに魅せられたといえます。特に雪国に憧れ、生活が落ちつくとも毎年のように通って、その風俗を写真やスケッチで記録しました。赤羽にとって、しっとりとした雪国の風土はまさに墨絵の世界でした(図2)。赤羽が墨絵で描いた最初の絵本



図2 雪国の物売り 1959年

『かさじぞう』を発表したのは1961年、50歳のときでした。水気をたっぷりふくんだ墨線は、雪の湿り気とともに、人情のあたたかさ、素朴さを感じさせ、まさにこの雪国の民話の心を伝えています。

墨絵と大和絵の二刀流

3作目の絵本『だいくとおにろく』(図1)は、モノクロとカラーの頁を交互に使うという印刷の制約がありましたが、墨絵と大和絵風の絵を効果的に使い、ドラマを見事に盛り上げています。赤羽はその後も好んで墨絵と大和絵風の絵を使い分けて絵本を描いており、この二刀流は好きだった宗達の影響かもしれないと語っていました。江戸時代初めに活躍した京都の画家・俵屋宗達は、琳派の祖といわれる人物です。宗達は町衆の出といわれていますが、自ら絵屋を興し、絵に関するあらゆる依頼を引き受けました。平安時代の和絵を新しい感覚で取り入れ、おおらかで型破りな独自の画風を打ち立てた画家としての姿勢にも、赤羽は共感していたのでしょう。赤羽もそれぞれの絵本の主題にふさわしい表現を求めて、日本の伝統的な絵画を研究しています。

「私にはカマエはない」

「私にはカマエはない。自分のワザなど知れたものである。そんなものをヒケラカさず、与えられた主題をどう生かすか、その主題のねらいは何か、それに専念する」*1と赤羽はエッセイに記しています。物語を視覚的に解釈し、筆を変え、和紙を選んで描かれた絵本は、同じ画家の絵とは思えないほどバリエーションに富んでいます。

全10巻からなる壮大な歴史物語『源平絵巻物語』(図3)は、岩絵の具や金銀の箔も用いて華麗で重厚な画面に仕上げられています。

一方、民話『したきりすずめ』(図4)では、墨刷りの版本に少ない色数の手彩色を施



図3 「源平絵巻物語 第五巻 ひよどりごえ」(講談社/改訂版：偕成社)より 1971年/1979年

した江戸初期の丹緑本の形式を取り入れ、細い墨線に、朱と黄、青の色を施しています。この絵本に用いた、切り抜いた紙を型にして絵の具を刷り込むステンシルの彩色方法は後の絵本にも度々用いています。



図4 「したきりすずめ」(福音館書店)より 1982年

赤羽流「鳥獣戯画」

3巻にわたる『おへそがえるごん』(図5)は、各巻が100頁以上もある愉快な自作の長編物語絵本です。おへそを押しと口から雲が出るかえるの「ごん」が、少年「けん」やへびの「どん」と友だちになり、戦の荷運びに連れ去られたけんの父親を捜す旅に出ます。化物や山賊を相手に人間さながらの活躍をみせるごんの姿は、絵巻「鳥獣戯画」に登場するかえるに想を得ています。墨によるのびやかな線画の表現や、横長の頁をめくるとに左から右へと時間や空間が移動していく画面構成も、絵巻を研究するなかで獲得した表現でしょう。

1980年に、日本で最初に国際アンデルセン賞画家賞を受賞した赤羽は、「日本の古い伝統的な美術の美しさに現代的な解釈を加えたものを、次の世代の子どもに伝えたい」*2と授賞式で語りました。子どもたちに開かれた日本の美術のとびらともいえる赤羽末吉の絵本をご覧ください。(上島史子)

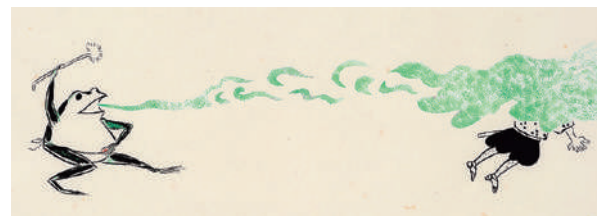


図5 「おへそがえる・ごん1 ぼんこつやまのぼんとこんたの巻」(福音館書店)より 1986年

*1 「八方やぶれの展開」(1981年)

*2 国際アンデルセン賞画家賞授賞式挨拶(1980年)

どちらも『新装版私の絵本ろん』(平凡社 2020年)収録

ちひろの花鳥風月

●2021年6月19日(土)～9月26日(日)

主催：ちひろ美術館
協賛：株式会社ジャクエツ

ちひろは身近な自然をいつくしみ、移ろう季節の風物のみずみずしい感性でとらえて、絵に描きました。日本では古来より、自然の風物を「花鳥風月」といい、絵画や詩歌などの重要な主題としてきましたが、ちひろの絵のなかにも日本的な美意識は脈々と受け継がれています。

身近な自然を愛して

「草むらの小鳥と少女」(図1)は、5月6月のカレンダーのために描かれた作品です。新緑のなかで、野の花を摘んだ少女が小鳥との会話を楽しんでいるようです。大きなストロークで描いた萌黄色のにじみや、しなやかに揺れる野の草の描写からは、さわやかな春の光や風が感じられます。小鳥を見つめる少女のまなざしは、ちひろ自身のものとも重なります。



図1 草むらの小鳥と少女 1971年

花が好きだったちひろの庭には、多くの樹木や草花が植えられ、四季折々の花が咲く花壇のほかにバラ棚や藤棚もありました。庭を彩る季節の花は、子どもの



図2 藤の花と子ども 1970年

姿とともに絵のなかに登場しています。

日本の伝統的な美術との接点

光や風、季節の花など自然をとらえる繊細な感性とともに絵画表現においても日本の伝統的な美術との接点が見られます。

「藤の花と子ども」(図2)では、中央に大きな花房が枝垂れています。花びらは、輪郭線を用いずに絵の具の濃淡だけで形をあらわす「没骨法」で描かれ、濃さのちがう色や別の色をにじませた



図3 秋の花と子どもたち 1965年

「たらし込み」の技法で、複雑な表情をつくり出しています。俵屋宗達など琳派の画家が好んで用いた技法で、ちひろは戦時下の疎開先でも宗達の画集を大切に見ていました。大胆なクローズアップや装飾的な画面構成は、日本美の典型ともいえる琳派を想起させます(図2・3)。

書と水墨的な表現

ちひろは娘時代から「万葉集」を愛読し、18歳より学んだ藤原行成流の書の手習いとしても親しんでいました。1970年に若い人に向けて絵本化した『万葉のうた』を制作します。モノトーンこの絵本では書で培った墨

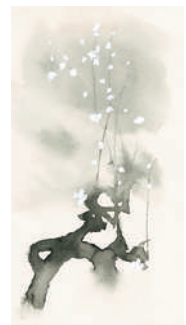


図4 梅「万葉のうた」(童心社)より 1970年

の濃淡や余白を生かした構図など、水墨画に通じる表現が見られます。歌人の個性が感じられる人物描写とともに季節の花や渡り鳥など自然の描写も魅力のひとつです。梅の花に亡き妻を偲んだ大伴旅

人の歌に添えた絵(図4)では、薄墨を背景に花の白を際立たせています。『万葉のうた』の作品からは、切ない恋心や人間模様の機微とともに、草木や野辺の風情を詠んだ万葉人の自然観にも共感していたことがうかがえます。

本展では、四季折々の草花や月など自然の風物とともに子どもたちを描いた作品を展示します。詩情あふれるちひろの花鳥風月をお楽しみください。(山田実穂)

窓

「赤羽末吉と中国から、憲法九条を思う」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団

「あの戦争のとき、大人だった私は、中国に対して罪人です。したがって、中国へは観光旅行にはげったいゆきません。しかし、なにか中国のお役にたつことがあれば、喜んでとんでゆきます。(略)それがこんど実現したのです」*1

1983年、絵本画家・赤羽末吉(1910-1990)は36年ぶりに訪れた中国で、絵本『あかりの花』の取材のために貴州省に向かう前に立ち寄った北京で、挨拶に立ちます。中国の絵本の関係者を前に子どもの本を通じて互いの国を理解し合うことの大切さを語り、自身もそこに力を尽くしたいと改めて決意を語った後、先のことばで締めくくりました。*2

赤羽は、1932年に中国に渡り、1947年に帰国するまで15年間を中国で暮らしました。雄大な風土を深く愛し、そこでの

暮らしを愛し、同地で家庭を築きます。熱心に郷土玩具の取材と収集を行い、各地を写生し画家として数多くの体験を重ねます。満州国美術展覧会で高い評価を受けて、国から成吉思汗廟内壁画の依頼を受けるなど活躍しました。帰国時にいのちがけで持ち帰ったスケッチや写真、資料の数々は、中国の風土や文化、人々への愛着を伝えています。

赤羽が暮らししたのは、まさに15年戦争下。日本が中国に傀儡国家・満州国を建国した時代。その意味で、赤羽は占領支配の立場で過ごしたといえます。

今日、香港や新疆ウイグル自治区での人権侵害など、国際的にも非難される中国。他方、尖閣諸島をめぐる日本との緊張関係がつつき、東アジアの各地で周辺諸国との緊張状態が報道されます。

こうした状況を強く意識して行われた本年4月の日米首脳会談。「日本は同盟及び地域の安全保障を一層強化するために自らの防衛力を強化することを決意する」と表明。米国は、「核を含む能力を用いて、日本の防衛を支援」すると応じて、「日米両国は、台湾海峡の平和と安定の重要性を強調する」と共同声明を発出しました。戦う姿勢の表明のようです。

「憲法九条を基盤にした賢明でしたたかな外交努力、平和的国際貢献こそが最大の抑止力であり、世界の全ての国との相互理解を前進させるのが日本の唯一の道」*3とは高畑勲が遺したことです。相手との対等な関係と理解し合うことなくしては、平和な関係は築けません。赤羽の中国に対する真摯で敬愛に満ちた姿勢に学ぶ思いがします。

*1 『私の絵本ろん』(赤羽末吉・著 偕成社 1983年) *2 『絵本画家 赤羽末吉 スーホの草原にかける虹』(赤羽茂乃・著 福音館書店 2020年)
*3 『君が戦争を欲しないならば』(高畑勲 岩波書店「岩波ブックレット942」 2015年)

「生誕111年 赤羽末吉展 絵本への一本道」関連イベント

2021年4月11日(日) 赤羽茂乃講演会「赤羽末吉の人生と絵本一大陸と雪国」

安曇野ちひろ公園の桜が満開を迎えた4月11日。赤羽末吉の研究者で『絵本画家赤羽末吉 スーホの草原にかけの虹』(福音館書店)の著者である赤羽茂乃さんの講演会を行いました。赤羽末吉の三男の妻でもある茂乃さん。家族ならではのエピソードも交えながら、赤羽末吉の絵本と仕事について、語っていただきました。その一部を紹介します。(船本裕子)

黒姫のこと

1966年、父は長野県の黒姫山の麓に、家族の、特に母の「家もないのになんで別荘なの」という大反対を押し切って山荘を建てました。子どもの本に関わっている作家や画家、編集者など、十数人が土地の人々から安く譲り受けた山林に電気や水道を引いて、それぞれが家を建てました。山荘には、父は仕事の合間をぬって、足しげく通って、四季折々ここで山の風景をスケッチしています。山荘仲間の作家、岡野薫子さんによると、父は地面にスケッチブックをおいて座りこんで夢中でスケッチをしていたということなんです。『スーホの白い馬』も父はこの山荘でじっくりと構想を練ったとい

っていますし、宮沢賢治の『水仙月の四日』もまさにこの地でできた絵本のひとつです。この作品は、スケッチをもとにするというよりも感覚を大切に描きたいと考えて、吹雪の山に登ってそのとき感じたことを書きとめ、それをもとに描いたといっています。黒姫の風景は赤羽末吉の絵本のなかで非常に重要な役割を果たしています。

『あかりの花』の取材で

1983年、73歳のとき、父は、「あかりの花」の物語が語り継がれてきた、中国の少数民族ミャオ族の取材のために中国に渡りました。取材に行く前に、簡単なダミーを描いて、それに基づいて自分が見て来ないといけないものを細かくリストアップしました。取材先のミャオ族の村で写真を撮ってスケッチを続ける父でしたけれど、リストのなかで、ユリが植わっている石臼というものだけがどうしても見つからない。一軒一軒、村の家を回って聞くだけけれど、そんなものはないねといわれて。バスも帰りの時間が迫っていて、もうとうとうだめだと、がっかりして帰ろうとしたら、こんなものは

あるけどといって奥から出してきてくれたのが、この石臼だったらしいんですね。それだ!というので、必死にデッサンして、帰りのバスで座席に座ったときに、「石臼がわかってほんとうによかったよ。これで子どもたちに嘘をつかないですむ」といったとのことでした。

そのような取材を重ねて、つくりあげたこの作品には、赤羽末吉のミャオ族に対する造詣の深さというものが感じられるんですね。



赤羽末吉『あかりの花』(福音館書店)より 1985年

それぞれの国や地域の子どもたちが、お互いに理解し合うことが平和につながる。そのために、絵本のなかで、その気候風土や暮らしや文化などは、なるべく正確にわかりやすく伝えたい。とことんそこにこだわった絵本づくりというのは、赤羽末吉のどの絵本にも感じられます。

「没後1年 田畑精一『おいしいのぼうけん』展」関連イベント

2021年4月25日(日) 酒井京子講演会「田畑精一さんとの絵本づくり」

『おいしいのぼうけん』を編集した酒井京子さん(童心社会長)の講演会を、当館では初となるオンラインで開催しました。一部を紹介します。(中平洋子)

『おいしいのぼうけん』のきっかけ

1971年秋、編集者として3年目だった私は今後の本づくりの事に深く悩んでいました。作家の古田足日さんのご自宅にうかがってご相談するなかで「現代の子どもたちがいきいきと描かれている本」「女性も働く時代だから保育園を舞台にした本」「三位一体の本づくり」が必要なのは、とご助言をいただきました。その後もたくさんお話し合いを重ねて、田畑精一さんと3人で新しい絵本づくりに挑戦することになったのです。

三位一体の絵本づくりとは

まず取材をするところから、3人でいっしょに動きました。取材後、意見を出しあって感動したことを話し合うのですが、まだ若い私が、おふたりに向かって自分の意見をいうのは怖くて辛い作業でした。

東久留米市のそよかぜ保育園の取材で、悪いことをした罰で押し入れに入れられた子どもたちが「ぼくたち悪くないもん」と、がんばって出てこなかった話を聞きました。子どものエネルギーに心

を動かされ、「それでいこう」ということに。田畑さんは、どんな画風で描くか試行錯誤を重ねてくださいました。この鉛筆画(下図)ができたとき、「こんなふう到最后まで描いてくれるの?」と古田さんは飛び上らばかりに喜んでいました。



田畑精一『おいしいのぼうけん』(童心社)より 1974年

保育園のリアルな世界からファンタジーに入っていく物語の鍵は「ねずみばあさん」にあります。ひとことでいえば、現代における悪の象徴ね。例えば今でいうとコロナ、戦争、核の問題、いろいろなふうにとらえることができると思います。不安や恐れに立ち向かう子どもたちの姿は痛快そのもの。それが長年支持された理由のひとつじゃないかしら。

高速道路と高層ビルの場面は、現代の象徴として描きたいという田畑さんのご希望でした。画家と作家の心の動きを感じながら、私も編集者としてたくさん意見を出しました。絵を活かすために文章をあちこち削ってもらったり、絵に子どもを描き足してもらったり、原価が厳しいのを覚悟の上でカラーページを加えたり。よい本をつくりたい一心でした。

仕上げに伊豆で合宿したときは、部屋いっぱい絵を並べて議論して。最後にねずみばあさんが退散するところは、夜中の1時過ぎても田畑さんも古田さんもお互い譲らず、もうこの本は出版できないのでは、と真剣に思ったこともありました。この絵本づくりこそ、まさに「ぼうけん」でした。

田畑精一が日本の絵本に果たした役割

田畑さんは、ずっと「子どもの心揺さぶるような本をつくりたい」とおっしゃっていました。表面的な楽しさではなく、子どもの心の深部に届いて揺さぶるような、そんな仕事をした方でした。

自伝的絵本『さくら』や子どもの本・九条の会の活動からわかるとおり、絵本を通して人間らしい子どもを育て、平和を守るという強い気持ちもずっとお持ちでした。

東京 美術館 日記

2月13日 (土) ☀
本日、ちひろ美術館・東京の公式 Instagram が開設された。今後は作品や美術館のようすなど手軽に楽しんでいただける情報を写真とともに発信し、美術館により親しんでいただくきっかけになればと思う。

3月16日 (火) ☁
新しい展覧会の初日。2ヵ月半ぶりにお客さまをお迎えする。没後1年 田畑精一『おいしいのぼうけん』展に関連し、1階から2階へ抜ける階段の壁面に大きなぬすみばあさんが出現。ショップでは、特別に春の福袋を販売することに。訪れたお客さまが笑顔でお求めくださる。

4月20日 (火) ☀
先週末までは全館暖房だったが、昨日からは全館冷房に。本日は外の

温度計が28度を記録する陽気となり、冬期休館中に植えた中庭の鉢植えの花たちも色とりどりのやさしい顔で見る人を癒してくれる。



4月25日 (日) ☁
本日より東京に3度目の緊急事態宣言、1,000㎡以上の美術館・博物館には休業要請が。ゴールデンウィークの来館を楽しみにして下さっていた方たちには申し訳ない気持ちでいっぱいだが、当館も感染拡大防止のため、臨時休館することに。一方、館としての初め

での取り組みであるオンラインでの酒井京子講演会「田畑精一さんとの絵本づくり」は予定どおり開催、70名以上の方が参加 (P. 6に報告)。昨年より対面でのイベントは中止しているが、それに代わるオンラインでのイベント開催は、これまで来館が困難だった方にもご参加いただけるチャンスとなり、美術館活動の可能性が広がる明るい側面。

4月27日 (火) ☁/☀
連休に発売を予定していた安曇野・松川村の天然水が入荷。ちひろの絵のパッケージはお土産としても人気が出そう。



安曇野 美術館 日記

2月1日 (月) ☁
今秋開催「ピエゾグラフィによるわたしの好きなちひろ展」の特設サイト開設の打ち合わせを行う。みなさんの作品への思いを共有したい、この展覧会。たくさんの応募があるように、アイデアが白熱した。

2月17日 (水) ☁
赤羽末吉作品のピエゾグラフィ制作を進めている。生誕111年となる今年、ちひろ美術館を含めて3つの会場で企画展が開催予定。コロナ禍での延期を経て、今年こそは、という思いがつのる。

3月1日 (月) ☀
「ちひろ美術館デジタルガイド」が始まる。館内12ヵ所に掲示したQRコードをお手持ちのスマート

フォン端末で読み込み、音声 (日英の2ヵ国語) と文字 (日英簡繁韓西露の7言語) で、ちひろ作品や美術館の活動についての解説を楽しむことができる。開館初日に早速、イヤフォンで音声を聞きながら作品を楽しむ人の姿があり、うれしい。

3月18日 (木) ☀
建物の天井をじっくり眺める男性。スタッフが話しかけると建築科の大学生とのこと。珪藻土の壁の感触を確かめながら館内へ。絵本カフェのテラスで、閉館ぎりぎりまで絵本を読んで過ごされた。

4月3日 (土) ☀
安曇野ちひろ公園の桜が例年よりおよそ2週間も早く見ごろを迎える。日中のぼかぼか陽気に対し

て、朝晩の冷え込みは例年通り。長く花を楽しむことができそうだ。



4月25日 (日) ☀
2019年にインドネシアで始まった子どものためのお話フェスティバル (Tacita : Pesta Cerita Anak)。今年は当館のコレクション作品のオンライン展覧会のほか、初のオンラインツアー&読み聞かせも開催。館内や花盛りのトットちゃん広場を案内すると、まるで日本に来たみたい! ぜひ訪れたいという声寄せられた。



ひとこと ふたこと みこと

東京館 3月31日 (水)
Facebook でいろんな絵を紹介していただき、仕事や家で嫌なことがあっても癒されます。『おいしいのぼうけん』も娘が保育園のときにやった劇で懐かしく見ました。

4月2日 (金)
母の影響で好きになったちひろさんの絵ですが、子を持った今、絵

に込められた平和の思いもともに子に伝えられたらと思います。ちひろさんの絵本を大好きだった母はもう文字を追うことが難しくなりました。「この帽子の子があなたに似てるのよ」と昔いつてくれたことを思い出してほしくて今度は母と来館したいと思います。ちひろさんの想いとともに美術館がず

っと存在してくれるよう祈ります。**4月22日 (木)**
やさしくあたたかなちひろさんの絵に触れ心が落ち着きます。こんなにも色彩が訴えかけてくるとは。生活が変化していく今、「我慢」といい聞かせながら明日を信じて今を大切に過ごしていますが、本物にふれる喜びは必要ですね。

安曇野館 3月16日 (火)
ちひろさんのやわらかい絵のタッチや色彩がとてもステキです。今年教育実習があるので、少し緊張していたのですが、子どもたちと会えるのが楽しみになりました。

4月3日 (土)
Je suis très heureuse de pouvoir découvrir les peintures

originales de Iwasaki Chihiro. C'est très émouvant. Merci !! *

5月5日 (水)
「あめ」という絵がすきです。りゆうは、色づかいや女の子がとうじょうするから。ちひろさんにあつて、この絵をどうやってかいたのかどういふきもちでかいたのか知りたいです。 (かりん)

赤羽末吉展より
5月4日 (火) 一抜粋
小学2年生の教科書にのっていた『スーホの白い馬』。見開き1ページの絵に、生徒たちがいろいろなことを語り、色のおき方などもよく気がついていました。子どもたちに多くのことをうたえかける絵本でした。



〈ちひろ美術館・東京 次回展示予定〉

●10月2日(土)～2022年1月16日(日)

ピエゾグラフによる わたしの好きなちひろ展
(東京・安曇野同時開催)

みなさんが選んだちひろの絵とともに、寄せられたメッセージを紹介する参加型の展示会を開催します。ちひろの絵に寄せる思いを分かち合い、その絵の魅力を改めて伝えます。

リクエスト大募集

絵にまつわる思い出やその絵の魅力など、メッセージを添えてあなたの大好きなちひろの絵をリクエストしてください。みなさんからのリクエストをお待ちしています！

応募の詳細は、特設サイト“myfavorite.chihiro.jp「わたしの好きなちひろ展」”をご覧ください。そのほか、SNS (Facebook・Twitter・Instagram)、はがき、FAXでもご応募いただけます。



いわさきちひろ 母の日 1972年

ちひろの歩み—童画から絵本へ—

〈ちひろ美術館・東京 赤羽末吉展関連イベント〉

●赤羽茂乃講演会「赤羽末吉の旅と絵本」

文化庁 令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業

赤羽末吉の研究者であり、三男の妻でもある赤羽茂乃さんによる講演会を行います。日本の風土を描こうと各地を旅した足跡や、赤羽末吉の絵本の魅力について語ります。

○日時：6月27日(日) 14:00～16:00

○参加費：無料 ○定員：30名

○会場：練馬区立石神井図書館

(東京都練馬区石神井台1-16-31 TEL.03-3995-2230)

※本講演会は、練馬区立員井図書館(30名)・南田中図書館(20名)で同時上映を予定しています。

○申し込み：要事前予約(5月27日より受付)

各会場で電話、カウンターにて受付

石神井図書館 TEL.03-3995-2230・貫井図書館 TEL.03-3577-1831

南田中図書館 TEL.03-5393-2411

本展の開催にあわせ、3つの図書館内に「赤羽末吉展」「ちひろの花鳥風月」に関連した書籍が特集されたコーナーが設けられます。

〈館外での展示会〉

●いわさきちひろ展 主催：茨城県近代美術館、ちひろ美術館

会場：茨城県近代美術館(茨城県) TEL.029-243-5111

会期：2021年7月24日(土)～8月29日(日)

●ピエゾグラフ 子どものしあわせ展

主催：越前市観光協会、ちひろ美術館

会場：「ちひろの生まれた家」記念館(福井県) TEL.0778-66-7112

会期：2021年6月18日(金)～8月30日(月)

●生誕111年 赤羽末吉展 スーホの草原にかける虹

主催：株式会社教文館、ちひろ美術館

会場：銀座 教文館 9F ウェンライトホール TEL.03-3563-0730

会期：2021年5月29日(土)～6月30日(水)

●上記のイベントおよび、展示会の会期は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

〈安曇野ちひろ美術館 次回展示予定〉

●9月11日(土)～11月30日(火)

ピエゾグラフによる わたしの好きなちひろ展
(安曇野・東京同時開催)

没後1年 田畑精一
『おいしいのぼうけん』展

ちひろ美術館コレクション
絵本で世界を旅しよう！



田畑精一 『おいしいのぼうけん』
(童心社)より 1974年

〈安曇野ちひろ美術館 田島征彦展関連イベント〉

●田島征彦、自作を語る 共催：松川村図書館

絵本画家・田島征彦さんが制作秘話や絵本に対する思いについて語るトークイベントを開催します。また、落語を題材にした絵本『じごくのそうべえ』や展示予定の絵本のみ語りも行います。

○日時：6月5日(土)14:00～15:30

○参加費：500円 ○定員：100名

○会場：松川村・すずの音ホール(長野県北安曇郡松川村板取84-1)

○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)

●安曇野ちひろ公園 トットちゃん広場5周年イベント

Vol.1 青空トモエ学園 田んぼの教室

第1回 田植え 5月30日(日)

第2回 稲刈り&はぜかけ 9月19日(日)

第3回 はんごうすいさんとりんどご祭り 10月10日(日)

Vol.2 トットちゃん広場5周年 みんなの夢プロジェクト

トットちゃん広場5周年『窓ぎわのトットちゃん』展にあわせて、松川村の子どもたちと来館者、それぞれの夢をかいた“にじみのオーナメント”を展示します。先行きの見えない時代だからこそ、みんなできいしょに夢を描きませんか？

○メッセージ募集&展示期間：6月5日(土)～9月5日(日)

○会場：安曇野ちひろ美術館 ○参加費：無料(入館料別)

安曇野ちひろ公園・トットちゃん広場 ○参加費：無料

Vol.3 課外学習ゾーン「青空教室」OPEN！ 7月23日(金)

Vol.4 トットちゃんの夏祭り・5周年祭 7月24日(土)

Vol.5 トットちゃん広場 平和のガーデンコンサート 8月8日(日)

Vol.6 トットちゃんの肝だめし 8月21日(土)

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況や、天候不良の場合は中止させていただくこともあります。イベントの最新情報は、安曇野ちひろ公園までお問い合わせください。TEL.0261-85-8822 chihiro-park.org

〈安曇野ちひろ美術館 『窓ぎわのトットちゃん』展関連書籍〉

●オーディオブック『窓ぎわのトットちゃん』

戦後最大のベストセラーとなった黒柳徹子の自伝的物語『窓ぎわのトットちゃん』がオーディオブックになりました。「絵本をじょうずに読んであげられるお母さんになりたい」と、NHK放送劇団を志望した黒柳自身による、貴重な朗読です。本編61編中、30編を収録。

著者・朗読：黒柳徹子 再生時間：1時間56分

講談社 本体1650円(税込)

購入先：Audible、audiobook など

CONTENTS 〈安曇野ちひろ美術館〉現代の町絵師 笑いと反骨の画家 田島征彦展…②／トットちゃん広場5周年『窓ぎわのトットちゃん』展／ちひろ美術館コレクション 子どもの時間…③／〈ちひろ美術館・東京〉生誕111年 赤羽末吉展 日本美術へのとびら…④／ちひろの花鳥風月／窓…⑤／〈活動報告〉4月11日(日) 赤羽茂乃講演会「赤羽末吉の人生と絵本—大陸と雪国」／4月25日(日) 酒井京子講演会「田畑精一さんと絵本づくり」…⑥／東京美術館日記／安曇野美術館日記／ひとことふたことみこと…⑦

美術館だより 合併号 No.212/105 発行2021年5月21日